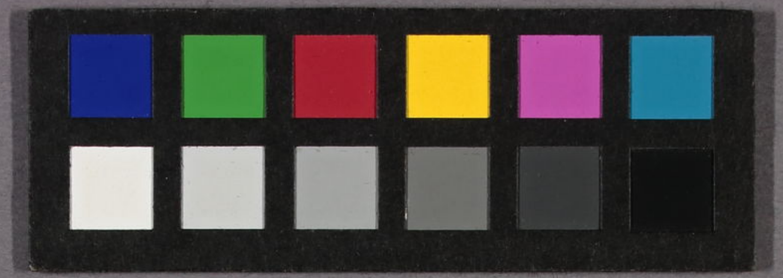

李笠翁
註解
改正月令博物筌
三冬部
四
千六 卷

三冬之部目錄 ○印ある八前より季ハ用ひきたる名ゝり

時令之部

△冬風 冬一丁
△冬日 冬一丁
△冬雨 冬三丁
△寒夜 冬三丁
△さむ空 冬四丁
△凍 冬四丁
△雪 六花 六出 冬五丁
△雪粥 冬八丁
△雪花 六花 冬九丁
△雪肌 冬九丁
△雪聲 冬九丁
△雪空 冬九丁
△雪消 冬十丁
△富士雪 冬十丁
○霜 冬十三丁
△冬霧 冬一丁
△冬の月 月さゆる 月凄し 冬二丁
△山眠る 冬三丁
△冬の暁 寒き朝 冬四丁
△さむし 冬四丁
△はつ雪 冬五丁
△雪山 冬八丁
○粉雪 冬八丁
△志ぐれ雪 冬九丁
○雪中の花 妙華 冬十丁

△霜柱　冬十三丁
△霜氷　冬十三丁
△はだれ霜　冬十三丁
△氷聲　冬十四丁
△鐘氷　冬十四丁

冬混雜之部

此部ハ、日令時令草木ことかくいろ〳〵ざる品をいだん

△炭　△切炭　△池田炭　△輪炭　△炭團　冬十五丁
△炭竈　△炭燒　△小野炭　冬十五丁
△火桶　△銅火桶　△火鉢　冬十六丁
△炉　△圍炉裏　△地炉　冬十七丁
△塗炉緣　冬十七丁
△炭斗　冬十七丁
△白炭　△枝炭　冬十五丁
△摺　△骨薫炭　冬十六丁

△霜花　△三ツ片花　冬十三丁
△霜夜　冬十三丁
△永　△厚氷　△氷花　△氷の衣　△薄氷　冬十三丁
△露氷　冬十四丁
△氷の轄　冬十四丁
△手炉　△懐炉　△手焙　冬十六丁
△火熨斗　冬十六丁
△埋火　△炉火　冬十七丁
△助炭　冬十七丁
△寶炭翁　△炭賣人　冬十七丁
△廻炭　冬十六丁
△獸炭　冬十六丁

冬所用木之部

△湯婆　冬十六丁
△蒲團　冬十六丁
△衾　△敷衾　△小衾　△屑子衾　△麻衾　△わた小衾　△鴛鴦衾　△ちるき衾　△わけの小衾　冬十六丁
△紙衣　△紙衣ふすま　△かしこ羽織　冬十九丁
△頭巾　△凡頭巾　△角頭巾　冬十九丁
△綿　△綿打　△延綿　△唐綿　△綿操　冬十九丁
△足袋　冬十九丁
△束綿　△綿摘　△壁綿　冬十九丁
△綿帽子　冬十九丁
△綿衣　冬十九丁
△胼　冬十九丁
△水洟　冬十九丁
△寒瘡　△妙薬　冬十九丁
△靴　冬十九丁
△新　冬十九丁
△胡蘿蔔引　冬十九丁
△葱　△冬葱　△葉葱　冬十九丁
△枯野　冬十九丁
△朽野　冬十九丁
△寒草　△冬の草　冬十九丁
△冬木立　冬十九丁

冬生類之部

△鵜　△鵜鴨　△鷿鷉　△鵠　△兄鵠　△鷹島　冬廿丁
△鷹　△兄鷹　△承塵鳥　△雀鷂　冬廿丁

△大鷹馬狩 冬 鷹狩 冬 鷹野
△狩場雉 冬 雉
△方草 冬 草
△ぬす立なと立鳥 冬 鳥
△鷹匠 冬 鷹
△鳥叫 冬 鳥
△千鳥 △川千鳥 △村千鳥 △浦千鳥 △濱千鳥 △小夜千鳥 △ゑハ千鳥 △島千鳥 △友千鳥 △白く千鳥 △夕千鳥 △からちどり 冬 千鳥
△鴛の衾 冬 鴛
△鳧 △真鳧 △小鳧 △黒鴨 △羽白 △きさうり △泥鳧 △ゆらむら △たちの村鳥 冬 鳧
△水鳥 冬 水鳥
△鶫 冬 鶫
△鱈 △塩鱈 冬 鱈
△蛎 冬 蛎
△追鳥狩 冬 追鳥狩
△鳥の落草 冬 落草
△教草 冬 草
△鳥立慕 冬 鳥
△刈牽縄 冬 縄
△鷹犬 △狩杖 冬 鷹
△狩人 冬 狩人
△鳥の音 冬 鳥
△教鳥 冬 鳥
△鳥屋 冬 鳥屋
△鳥網 冬 鳥網
△鳥刺 冬 鳥刺
△鳥黐 冬 鳥黐
△鳥籠 冬 鳥籠
△鳥屋入 冬 鳥屋入
△鳥屋明 冬 鳥屋明
△鳥屋の口明 冬 鳥屋の口明
△鳥屋の口閉 冬 鳥屋の口閉
△鳥屋の口切 冬 鳥屋の口切
△鳥屋の口祝 冬 鳥屋の口祝
△鳥屋の口固 冬 鳥屋の口固
△鳥屋の口塞 冬 鳥屋の口塞
△鳥屋の口開 冬 鳥屋の口開
△鳥屋の口祭 冬 鳥屋の口祭
△鳥屋の口納 冬 鳥屋の口納
△鳥屋の口留 冬 鳥屋の口留
△鳥屋の口見 冬 鳥屋の口見
△鳥屋の口初 冬 鳥屋の口初
△鳥屋の口終 冬 鳥屋の口終
△鳥屋の口上 冬 鳥屋の口上
△鳥屋の口下 冬 鳥屋の口下
△鳥屋の口中 冬 鳥屋の口中
△鳥屋の口外 冬 鳥屋の口外
△鳥屋の口内 冬 鳥屋の口内
△鳥屋の口前 冬 鳥屋の口前
△鳥屋の口後 冬 鳥屋の口後
△鳥屋の口左 冬 鳥屋の口左
△鳥屋の口右 冬 鳥屋の口右
△鳥屋の口東 冬 鳥屋の口東
△鳥屋の口西 冬 鳥屋の口西
△鳥屋の口南 冬 鳥屋の口南
△鳥屋の口北 冬 鳥屋の口北
△鳥屋の口春 冬 鳥屋の口春
△鳥屋の口夏 冬 鳥屋の口夏
△鳥屋の口秋 冬 鳥屋の口秋
△鳥屋の口冬 冬 鳥屋の口冬
△鳥屋の口朝 冬 鳥屋の口朝
△鳥屋の口夕 冬 鳥屋の口夕
△鳥屋の口夜 冬 鳥屋の口夜
△鳥屋の口昼 冬 鳥屋の口昼
△鳥屋の口晴 冬 鳥屋の口晴
△鳥屋の口雨 冬 鳥屋の口雨
△鳥屋の口雪 冬 鳥屋の口雪
△鳥屋の口風 冬 鳥屋の口風
△鳥屋の口雲 冬 鳥屋の口雲
△鳥屋の口霧 冬 鳥屋の口霧
△鳥屋の口露 冬 鳥屋の口露
△鳥屋の口霜 冬 鳥屋の口霜
△鳥屋の口氷 冬 鳥屋の口氷
△鳥屋の口雷 冬 鳥屋の口雷
△鳥屋の口電 冬 鳥屋の口電
△鳥屋の口虹 冬 鳥屋の口虹
△鳥屋の口月 冬 鳥屋の口月
△鳥屋の口日 冬 鳥屋の口日
△鳥屋の口星 冬 鳥屋の口星
△鳥屋の口天 冬 鳥屋の口天
△鳥屋の口地 冬 鳥屋の口地
△鳥屋の口人 冬 鳥屋の口人
△鳥屋の口物 冬 鳥屋の口物
△鳥屋の口事 冬 鳥屋の口事
△鳥屋の口言 冬 鳥屋の口言
△鳥屋の口行 冬 鳥屋の口行
△鳥屋の口来 冬 鳥屋の口来
△鳥屋の口去 冬 鳥屋の口去
△鳥屋の口住 冬 鳥屋の口住
△鳥屋の口坐 冬 鳥屋の口坐
△鳥屋の口立 冬 鳥屋の口立
△鳥屋の口臥 冬 鳥屋の口臥
△鳥屋の口食 冬 鳥屋の口食
△鳥屋の口飲 冬 鳥屋の口飲
△鳥屋の口着 冬 鳥屋の口着
△鳥屋の口脱 冬 鳥屋の口脱
△鳥屋の口洗 冬 鳥屋の口洗
△鳥屋の口染 冬 鳥屋の口染
△鳥屋の口織 冬 鳥屋の口織
△鳥屋の口縫 冬 鳥屋の口縫
△鳥屋の口裁 冬 鳥屋の口裁
△鳥屋の口張 冬 鳥屋の口張
△鳥屋の口洗 冬 鳥屋の口洗
△鳥屋の口染 冬 鳥屋の口染
△鳥屋の口織 冬 鳥屋の口織
△鳥屋の口縫 冬 鳥屋の口縫
△鳥屋の口裁 冬 鳥屋の口裁
△鳥屋の口張 冬 鳥屋の口張

△鯨 △鯢 △鯨突 △鯨舟 冬 鯨
△鯣 冬 鯣
△夜具引 冬 夜具
△竹筍 △筍 冬 筍
△河豚 △ふぐと汁 冬 河豚
△海鼠腸 冬 海鼠腸
○鮪 ○初の身 冬 鮪
△潤眼 冬 潤眼
△紫漬 冬 紫漬
△網代 △網代木 △網代人 冬 網代
△氷魚 △氷魚使 冬 氷魚
△生海鼠 △海鼠 △金海鼠 冬 海鼠
△切干 冬 切干
△生薑酒 冬 薑酒
△鍋燒 冬 鍋燒
△風呂吹 △大根蒸 冬 風呂吹
△抽味噌 冬 味噌
△杉燒 冬 杉燒
△納豆汁 冬 納豆汁
△蕎麦湯 △そば粥 冬 蕎麦湯
△蒜漬 冬 蒜漬
△雞卵酒 冬 雞卵酒
△菜漬 冬 菜漬
○料理献立 終

必用之部

此部ハ冬の天氣うらゝかなる其外養生等ふさのそ

飲食之部

○此書の本文をいろはにほへとの次第に分ち月令以呂波分物惣目錄と題号を名づけ別に壹冊の季節に用ひきたらぬ物ゝ或ハ月並の外本魚鳥の異名和名古名ハ聲ふちがひくゐろは分ふ出ざる本書ふ注解のうがかしきもの又ハ出所の落るる物ハ此目錄の條下ふ辨明を本書ふ二處三処ふ分うがち委き訳ハ何れの部ふもはうがち紀物此目錄ふて見るべし

をの部　沖津鳥　冬ノ子

この部ふくゝ恋ー鳥ともつゝ

あの部　秋湊　九ノ廿丁ふ訳ス　春湊ノ出

みの部　水無月　六ノヲ　水無月の出處万葉集ふ本文おそちくる故此処ふのべず

余ふ准ーて知るべしー其外狂・俳・詩・哥の便ふふるる事多く載る故此目錄ばかりふそも會席などに懐中ーふ失忘ふ備ふべしー

三冬之部

冬の異名和名冬の神等　十月の初ーる

時令

此部ふハ冬ふ三ケ月の時候ふかゝるる事なーるべし

冬ノ風

哥ふハ行ふ讀又音寒く吹まふはしを云

占考　冬南風吹ハ三日ゞ間霜多ーー寅卯の日風行れバ其月ハ風多ーー

哥　秋やらの楢のまろ木ふ山のかけしをそひこやまふ　引乃

をとゝ門ーーふのきーるる風のこゑ　式部

俳　冬の風法師ハ皆おもせ野明　法師ハ門ふ波もことかるゝつゝみの風　蓮二

詩　冬風五字對句　同上

黒帝行威粛　雲岳千岩瘦

冬ヲツカサトル神ノイセイガオソロシイ　雲ノカゝツタタケモ風ガフケバ岩ガヤセテミエル

飛廉意氣雄　霜林萬葉飛

カゼノカミサートル神ノ心イキモスサマジイ　シモノフル林モカセガフケバアヽタノ木ノハガトビチル

詩　冬風　鮑明遠

出自薊北行疾風衝塞起

薊北トイフ所ヲ出テユケバハゲシイ風ガ
陣ゴヤヲフキタヲスヤウニオコリテキタ

沙礫自飛揚牛馬縮如蹈

スナモコイシモミナヒトリデニトビアガルユヘ
牛モ馬モスクンデ子ゾニホドニナッテミエル

冬霧　秋の霧ほどふかくはないが　冬のきりくらいとかく水ぎはが立さ

哥　きりてわく風もえこめされ川なきりくやおもてのよるる成くん　基俊

おもし山みもとをくらうきりの　為家

詞　朝やけ。千もの遠ふ。なえくさむき

俳　寒そうな外をまはれば北の方二水

狂　朝ぎりの日は法ねようも個代もる　和水

冬日　黒道として北のうらをゆく日をじっと

哥　ほくそ紅葉のあるひまにて
彩雲ふめるみその日ゆけ　采世

詞　ほどろきげ。やぐるほどとき。よいの
日かげ。さびき日うげ。雪ふるつろ

俳　みその昌や人倍母の城はるり　許六
秋の日や物うと呂ふ奴のあゆこ　湖春

狂　日ふかくのこのまの月もるよろこんでゆくまうと　鶏明

詩　冬日五字對句　同上

融融浮和氣　初漆一線長

コノゴロハジテ女ノヌヒハリノ糸一スヂホト長クナル

忽忽短晝光　漸過三竿外

セハシクシテヒルノカゲカミジカク　ゼンクニ三竿ホドバカリノボル

白居易

詩　冬日詞

杲杲冬日出照我屋南隅　負暄背日

トシタル冬ノ日ガ出テコチラノ家ノ南ノスミヲテラス　ヒナタボコヲシテ日ニアタル

坐和風入肌膚　ウットロムイチスハレバ

ノドカナ風ガ分ダ初似飲醇醪又
ヘニホルヤウナ
如蟄者蘇ハジメノホドハヨイサケヲ呑
ゴトシ　モノ　ヨミガヘル
メイテ井タモノガイキカヘッタヤウニナッタ　外融百骸暢中
適一念無カラダノソトハコヨウユルンデカ
ヤスラカデナニモ思フコガナイ　曠然忘所在心與空虚
倶何トナク心ガヒロビトシテ
ワスレテコヽロハ虚空ト　オナジヤウニナッタ

冬十月　唐宮中ノ女ノヌヒ針ノワザヲ以
故事テ日ノ長ニ比ス
冬至ノ後ハ一日ニ糸一スヂヅヽ多
クヌハルヽト云リ　唐雑錄ニ出

冬十月　△月をさまる。△冬をさまる。
枕草紙　お老のけしきふ
△
たゝくゝとともぐゝしきものなり
さゆかハ澄きりたるの甚しきなり

㊐　拾遺集　友輔

「あかつきのおれはの霜乃さやけさを
月のひかりのそふるなりけり

千載

大納言經信

夫木
名取川ゆふくよろそめる岸の下ふさ
むへころ月をく風ふけるなり

續古今　家隆

なるあつくいく夜袖よりそめの月　蒲生
附句ふくる窓明の月

㊐　氷ゝやとる。この氷ゝやとる。指くま
うた。をふかふく。このまさりぬる。
みぎれ芦のまろ。雪に水ともさかぬみけ。雪ふまおく。

㊐　藻花のあつ渚えてくそめの月　蒲生
そ月やつまるきさ月も松ハ松其角

㊐　ろいとくやその雪られる歌いや
光のけそひぞまさるを月　貞左

雨のあめ
冬ゝ雨　冬の雨そこ降ふりくらし
多くハ雪ふきこほるらん　為家

㊐　ふる雨のもるゝ窓やそふ吹こほるらん
嵐や雪ふ吹こほるらん

この里そこそかしこ
外山をこれかまもるそつもれる　衣笠

俳　冬ごもりふるき板やに　羅人
扉のすきもいれてさひ〳〵その雨　加十

狂　なぐさくも山かつまてそのあ
あらしふきこせと　信徳

山眠

冬の山の姿をいふ。四季の山乃
姿をいつさる詩あり次にあるへ

詩　四季山之詞　臥遊錄ニ出

春山淡冶而如笑　春ノ山ハアツサリトシテ人ノユメルヤウナ
夏山蒼翠而如滴　夏ノ山ハアラ〳〵トシテウルホフヤウナ
秋山明淨而如粧　秋ノ山ハサッパリトシテカザリタルヤウナ
冬山慘淡而如眠　冬ノ山ハモノサビシウテシヅ〳〵ツタコロナリ

右の詩の心を以く季に春ハ山笑ふ
秋ハ山粧ふ冬ハ山眠ると三ツ出して夏の
山滴を季に用ひさるも俳の拠〳〵

寒夜

△冬の夜。秋の夜ハものさ
ひしさにたえかねる物なれ

とそれよハやく〳〵かりてさむけれ
なう〳〵ねる冬の夜のさはさう

為家

俳　さそれよハねやく〳〵かりてさむけれと寒き夜を
ふすきおもなけれハ外山ふまもえん　泉志

狂　うれしやも終ふをうんてをのおハ
おうへきうけく〳〵おのれ　道久

詩　冬夜七字對句　詩礎

起看北斗寒垂地　オクタチミレバホクトオキテニレバホシトノホシノサムゲニ地ニタレテノミエル
俯听長江流有聲　フキテニレバホシトノホシノヒカリガウツッテキテ水ノドウ〳〵ト音ガニテナガレル

詩　冬夜五字對句

曉角催寒一漏　キヤウカクモヨホカニアカツキノフエノ音ガサムイトケイヲモヨホシ
孤燈旋落一花　トウサヒトツノトモシビガヤモスレバハナヲオトス

△冬暁 あのおのあき △さむき朝 俳 暁や我つけ初る榾のまお 荷兮

哥 雪玉 おきゐるまゝ袖ふおとをき暁のおもひそへ

詩 七字對句

屋頭木葉飜寒片 茅店月 詩礎

△さむ空 俳 さむき空ちり〳〵初る 宙存

△さむし 俳 三日月の一筋さむ〳〵いつく禽 支考

凍 △こほる。凍ハおもて氷ルをいふ。△こごゆ 俳 いもかゝの海さも廣し 猪柳

△ほめたき 枕冊子ニ見エタリ

牆角梅花吐暗香 板橋霜

カキノアタリニムメノハナガホノ〴〵トニホフ

ヤ子ノウエヘコノハガサムサウニヒラ〳〵トチル

カヤブキノイヘノ月

哥 玉葉 雪をめづく我ふるさとの月風やあらむ〳〵

俳 はめつくもあの見ぬ俤ゆかしうち〳〵

狂 俤をいつくきのふの〳〵あくまでいつく〳〵

雪 異 △六花 故事ニ出ル 名 六出 九丁目ニ出ル 六華 玉塵 銀樟 六葩。

雪ハ豊年の瑞トス事并雪女其外雲ケ委〳〵天地窓間珍トス本ニ出ル

哥 古今集

雪こそはめつらしけぬを木のもとも花とこそ見めふりしかひあり

山家雪

俳 人のふみこのみやま路埋ぬ跡

新堀の松ふり雪のふりかゝる

田家雪

陰うつむる縞田も菴乃軒ふり

外山ぬ雪てくる〳〵もゝき

実蔭

柏玉 遠山雪

ゆふぐれとなれば
雪のかへ〳〵の山のこと乃由
雪玉　谷雪
雪のまれなることをかこちて谷の戸に
ふる乃ゝ楮や さゝえ〳〵もち〳〵弥
同　川邊雪
水の上にふるもつゝかは筏鹿川
さゝまこやくゝねのふるみ及くん
夫木　湖邊雪
ゆくゝやはれ山や風海うけく
ひとゝゝみるしくまるのふ雪
風雅　行路雪
嶺くの先ゝ門乃をわきくたく
行ゝ絶ようもまよふ雪
夜雪
夜のとぬれ沼乃こをうくんへつゝは
つゝゐるまのひゝうるゝ名こ
夫木　名所雪
何れまでなるふゝのおゝをまき
所もまうぬまのふくまを
為家
小弁

(詞)降るつもるかきそ降。かきた
まて。ちうくゝる白妙 初雪十月の條ゝ
出ハ紫人の垂衣なる。山ゐた雪。嶺の
松ゝ埋う 阿ハそれどたゝ
きゆゝ氷のくおつる 風江ふきこ雪
げのうゼ。まよせ。又ゝふ風の吹由
るよをよむうう 海辺
つゝゝぬ。海士のとまやの埋う。まふ
たゝゝ浦。雪ゝのせゝうる海ゝ。波
のおゝえゝうぬ。それ高波など自
ゝくのけ〳〵ゐいうくようむべし 産ふ行
いくゝふ。そゝゝくのゐき。ゝ
木ふ 木くの枝。梢えそびえ。梅ふま
がふ。十ゝうゝの花ゝ海がふ。松乃
ちゝせのそ波 梢ゝ。梅をいろことわ
うぬ。まゝ旬ふ。余所のまゝ折ま
源雪ハ 行ゝくくもかよはぬ。めうれ
ゝまもうげりて。雪ゝ。雪ゝ
。かゝきくく。そう。雪ゝ
。右のふ要ゝ花ゝは 土尻ふまゝ

連 朝きよめをしてまつる物の名 豊通
世ごよみの名 その係山の名 声 紹巴

能 我をともの人は昨日一里の上 其角
帚人おいてこれくらんものを 芭蕉
雪折ふり切る竹や軒の湯 宗甫
雪おろしたる夜ほとゝぎす 徳元
澤うそ氷魚の網代 支考
燈火をそむけ顔なる寒さ哉 蓼太

狂 さてもするやうを帽子にあてゝ
かくらもさゞれ大いへの山 宗増
雪どのゝ中くやうらもまぬ白妙ハ
ひくにくねる天地のうへ 貞徳
こゝろ山あるとそこそこの白ハあまどの
かゞみがくしたをる梅もみどり 貞柳

詩 雪五字對句

天地無塵事	同上
妓舞時飄袖	
江河有篆文	
歌梅併壁枝	

佛樹驚梅早 尖峯排玉筍
凝陛類月殘 圓石疊銀盤

詩 雪七字對句

三千世界銀成色 犯長沙
十二樓頭玉作層 没樵路
看來天地不知夜 梅花信
飛入園林總是春 柳絮風
雪ノ 瓊林玉樹 冷艶寒光
詩詞 呈瑞 散銀盃 花意思 鋪作月

詩礎

唐祖詠

(詩) 雪詞

終南山ノニナガタカフニユヒバツモッタユキモクモノハシニウイテアルヤウナ

林表明霽色城中增暮寒

同

千山鳥飛絶萬徑人踪滅

柳宗元

山ノユキニトリノカヨヒモミヘズイヅクノミチモユキニウモレテヒトアトモナイ

孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪

ヒトツノフネニミノカサキタオキナガツテヒトリサムイ江ノユキゲシキヲオモシロガツテウヲツリテ井ル

雪日本之故事

香爐峯雪

雪ふくふうたるゆゑ一條院

はーちく出させ給へとありしかば清少納言ことのおろかなるいぶかしくおぼせしかど人とおぼせしなり

ゆきいとたかく積れば御前に在々る清少納言ことさらにや御簾を巻上げたり帝ことの外感じ給ひ次ふきうたの詩の心を合せ給ふなり

(詩) 朗詠集

遺愛寺鐘欹枕聽香爐峯雪撥簾看

白樂天

コノ詩ハ楽天炉山トイフトコロノ山荘ニ居テ東ノカベニ五首ノ詩ヲカケノ第四ノ詩ナリ廬山トイフテラニチカイキトイフテラニチカクカウロホウノフモトナリ

(俳) 搔あるさすがに内ぶすま

雪ふる時ハ藏人所の衆大内小泰しとつきしら一条院の時より始て後伏見院永仁のころ迄ハありしとぞ今ハ絶てなし祝章昆ふ曰あすの子余日の雪にこもりをるを出よふ武部丞

雪山

雪ふる時ハ藏人所の衆大内小泰して藤壺ふ雪の山

(俳) 富士ハ一夜に白のつぶらもの

雪の粥

雪のふりたる時ハ藤原仲文院の御所へ參たる院の御粥

(哥) 白雪のふりぬる時ハ

雪ふりぬと仰られ給へバ

雪ふりぬと仰られ給へバ

いとうくふるうみうる

俳　空雪や此日のまことを椀の粥　東窓

粉雪　丹波の粉雪とまぐく草ふれく粉雪よねをつきまるいくうれ似くしばいく
なう溜こゑとてふべきを丹波とそぞ
鳥羽院穢くれそ〳〵まいて雪のふ
るふかく仰られ〳〵と讃岐典侍日記ふ出

俳　山風や雪の粉雪を呉郷
玉兎杵とうて粉雪くふ〳〵する分香

雪唐故事　**柳絮**　謝太傅安トイフ人兒女ヲ内ニアツメテ文ヲ講論ス俄ニ雪フルヨツテ兄ノ子朗ヘルニ問テ曰白雪紛々何ニカ似タル

朗答テ空中ヨリ塩ヲフラスガゴトシ
トイヘリ又兄ノ女ニ向フ答テ曰柳絮ノ風ニヨツテ起散如シ安モ奇
オヲ賞シテ悦フ世説新語ニ出

俳　ふるさとは雪のあけぼの

雪花　ヲアツメテ瑞木ノ花トス

△六花。天上ニ瑞木アリ雪

△六の花とふ六。草木の花ハ皆五出
なう雪のミ独て六出有と月令廣義ふ出

俳　馬の尾ふるの花ちる山路ふ支考
そ雪ハ降ハ降物ふ六ツのそなふ洞

雪花　△六花。天上ニ瑞木アリ雪

△六の花とふ六。草木の花ハ皆五出
なう雪のミ独て六出有と月令廣義ふ出

俳　ねておきぬ人をこそ雪荷風

雪肌　世間美人を賞ふる言葉ふ
雪ともいひてもいふる

雪雲　武單于ニ使ス單于ト
ラヘテ北海ノ上ニオク食ニ
之ヲ卧ナガラ雪ト毛毛トヲ齧
テ數日不死遂ニ漢ニ歸ル

放馬　齊国ノ管仲旅中雪フ
カキニアフテ道ヲ失フ其
時老馬ヲ放テ行クニ任セテ隨ヒ
行バ遂ニ道ヲアヤマラズトカヤ

語なきこバ隨分季とうつべし　これらの事うつゝ衣うづの例もあり

雪空　雪催ひの雪気（俳）ともいふ　同くもりの耳よ新之一晶

雪聲　音をいふ　（俳）名ハ強小袁表ともいふ　雪の声　嵐雪

（哥）

風をいとゝおもひ知る雪に新うらめしく
月ふるけの窓うつ雪をけさきけば

為相

（詩）雪聲詞

石泉凍合竹無風夜色沉
萬境空イシニノイヅニモコホリガハリツメテタケニカゼノオトモセズヨルノケシキガモノシヅカデセケンガヒツソリトシタ

試向靜中聞側耳隔窓撩亂撲春蟲
フトモノシヅカナウチニ耳ヲソバダテ、キケバマドヲヘダテ、ハラ〳〵ト春ノコロムシガヤウジニアタルヤウナオトガスルユヘアケテミタレバユキガフルノデアツタ

雪消　昔ハ雪多くふる時ハ救餬弁菓物を互ニ相饋る（俳）

ふれを雪けしの寒をわらふことなかれ

富士雪　富士ハ四時雪ありといへ　御傘ハ雑と云通俗志連哥おくまじき事大ニ論ずるなり委く補遺ニ出ル

（狀）雪中之文

矣差拙畏寒徒斂衾安閉
朝來六花呈瑞彌望爲一
色之瓊瑤來歲之豐可知
腎擁炉唯仰神仙来賞之而已

○書簡ハ寒氣・歳暮の條見合をべし

妙　寒中の雪水を貯へつゝよく用ゐれバ一切の熱毒を解ス
茶　雪中夜寒手ニこゞへぬ法。胡椒を二ツに割りろくろくいと

こかし　紙ふくろに包む　臍ふあてくゝり

霜　朝霜　夕霜　霜のごとくおくりのかり

㊐新古今　ふるさとの山田のくろほなみ霜さえわたる夜半の月かな　慈円

夫木　かものそらねのうすきもみぢ葉　俊成

同　霜夜　ふしきハ霜夜へのわけ行の定家

同　枕さへ霜夜へのわけ行のこゑ　後九条内大臣

拾遺集　おきあかすうらのとまやの霜のうへに月かたぶけばしろき袖かな　信

柏玉　曙霜　霜ふりしきたる野へのあけぼのゝ

同　朝霜　霜のまの世界はれゆく朝ぼらけ

㊊詞　霜ふりしきたる野へのあけぼのゝ霜のまの世界はれゆく朝ぼらけ。霜のまの世界。霜のまの世界。霜のまの世界

尽ス左右ノ人是ヲ疏テ譖言ス主怒テ衛ヲ徹中ニ入ル衛天ヲ仰テ罪ナキヨシヲ哭ス夏ナレ𪜈霜大ニ降レ淮南子ニ出

鶺鴒畏 シャコオノレ 霜ヲ畏ルヽモノニ季ハ三四十八ニ出ス

鐘聲 唐ノ盧山ト云ル所ノ鐘ハ霜フレバ自ラ鳴ルト山海經ニ出

霜柱 寒ツヨキ朝ノ野辺ナドニ土高くもりあがりて柱を立るごとくなるを霜柱と幸の神 金波

(俳) おさ〳〵もかるき柱と幸の神 金波

(哥) 夫木 雲ふきさゆる谷の月久陰地作ゑくもりし行衛もなく土高

霜花 ふれバ皆百花の狀あるをいへり 光俊

(哥) 三ツ花。霜濃く屋上ふ

(俳) 霜の花ハ氷の花の轉訛ともいふ雪を六ツの花とよめど霜を三ツの花と云やうなり

(俳) 季ハ日數ハ多しおの字 冠柳

霜氷 霜の次第から氷るをいふ

霍夜 (俳) 人さくも稀ふ勢ふ夜 言水

(哥) 古今冴ゆらふえバくまのゝさやくまおよどのうひくろぬる

はだれ霜 (哥) 夫木 公實

ふりはてゝはだれもおふるをのよハ野のうへもいろふさゆらん

氷 厚氷 氷花 氷衣 薄氷。異名 氷面鏡。氷の和訓ヒ

むかしハひといつ二字によぶ事ふるくいつ後ふこほりとみハ氷のそらくる面が鏡のやうにみゆる故ゝ名づく氷の花ハ氷を花と見るこゝろ氷の衣ハ池川おそろたるごきぬゝ似るようのみや

(哥) つけしよりわくらゞのわくりをゝさゝれいとけんこもなくおーふそり 兼盛

氷おや ゝくらゞふくなるのさくらんのようなるれ 行資

氷のおれ氷の氷乃さやけきハ月のひろれみうくこそり 紀ノ友則

續古今　谷氷　為尹

ふくるまもなく　おるころなり

新勅撰　湖辺氷　内大臣

玉ゐのいでゐや　おのづからなる　なみのうへも　こほりあるよぞ　いるりん

柏玉　葦間氷

月ぞすむ　おろ〳〵おろす　あしのねを　ふもとも波も　こほりあきぬ

夫木　薄氷　小侍従

ほのかなる　ほどのうすらひ　とけぬるは　ものの行もど　しきにぞ　有りける

野ものがたり

詞　よさへておる。嵐おる。雪のふる。ひかたおる。

入江。山の陰。おの袖。細代。音なき。山川。ふち。淵の大ぢ。瀬。

さお。池の面。お張ふ。汀のお。おる。

舟もよおる。うおは波おる。波さわぐ。を

ーの羽風。むそぶ。

連　一とせを　ふるおのかぐ　宗祇

俳　氷い池をとけ　すゐ雨まあれいと　鴨ゐて水まで　澄腸や　お舟の舟お　白羽　正秀

荘　水うえの上も氷のそうにく　いらのあくまも　凩とものふ池よ結ひ　ゐもうきゐ　ゐの吸をおやり　十慶

詩　氷七字對句　詩礎

寒生玉指紅先透　寒侵玉・才紅先・透寒・侵玉・

光遂金刀翠欲消　光遂金刀翠・欲消・冷浮銀・銀

氷ノ驚　狐聽　河水氷ル時狐是ヲ渡ル此後人モ氷ノ上ヲ行ク

○本朝信州諏訪ノ湖モ氷厚クシテ人馬氷ノ上ヲ往来ス先ヅ狐来テ渡初ルヲ見テ人モ行キ通フ　春氷解ベキ前ニ狐帰ルヲ見テ是ヨリ人モ不渡トイヘリ

氷聲　氷をさくく聲ありて氷をさくぐきくぐきくぐき

○山炭がま八山のくぼき所を穿ちて窟とほりかまをぬり薪を多く入まさく炭を焼く

哥 拾遺集 深山木を切みだるゝ斧の音は好忠

夫木 そのうれの炭やき衣うれぬとて人をは人のなりわひのうへ おなく

詞花 山ふかみやく炭うる翁さへ小野山ふかくすむけのまとゝめけり 師時

金葉 炭うまにかゝるまけのまとゝめけり 匡房

新古今 百敷や古き大内の里 式子内親王

詞 ときこぐまの山。猛のときこぐ所。まびく煙。

○ふうふかりう。このるふうる。けふをふきく 一風。炭中衣。炭焼をふう。

○ふうふうこのぼるふうをよばふ

又やりなる脇をよふむとまれる

年八ふうたきやきの洗ふ水もおふ 支考

俳 炭やきの洗ふ水もおふ 支考

東坡

詩 炭詞

豈料山中有遺寶 山中ニヨノヤクチ宝ガオチテ有フ

トハオモハナンダハ 磊落如鑿黒万車炭クロフ

シテウルシノヤウニツクロフテ流シタノクルニノセテ出ルスミヤ 流膏逝

モナカッタテフラフガ 陳ニ清風自吹散ヒトシキ

乳无人知コノスミヲタベアブラヲ流シトハヲタギラスコトヲシルモノ

リヅクノキヨイ風ガ根苗一發浩无

イキリヲフキチラス

際コノスミニヤク木ガハエルコト八根

モニハエホウゾモナイフトジヤガ 万人鼓

舞千人看ヲタク人ガヨコンデイチニハフニヤ

ヲスコトニ風向

投風潑水愈光明炭ニヤイテ火ヲ

フテ水ヲカケレバイヨ

ヨクヒカリカヘヤク

悍 火ニヨコツテカラハ玉ヲモトロカシカヲヲ

モナガスホドナイキホヒモアルモノジヤ

燦玉流金是精

炭之故事

胡桃炭 唐宋ノ世ニハ炉ノ炭ニクルミヲ用フルヲ上トス

獸炭 唐ノ羊琇ト云ル人炭ヲ獸ノ形ニ作リ酒ヲアタヽムトカヤ

製法ハ炭十斤鉄屑十斤合セ搗テ糯米ニテ子リ乾テ用ル時ハ火キエズ

楢 △わら火△骨薫炭 そのかくいはゆる楢炭ハ自然ニ火ノ消ルヲ待テ其上ヲ火をこけら△山中などにて埋火の用とする哥

おもわくのあるげに火をこけらつゝく山中の埋火

(俳)誓ひそや百歳の祖父やかくれ炭 左東

廻炭 炉中ニ炭をつむ稽古のたとへはじめあるをのの置さる炭を

あげ〳〵客人おりひく炭をつぐ

(俳)二の猪のをれを名ゐ炭

白炭 ○花炭△枝炭。多くハ燭の木をやく〳〵灰中ニ埋みまぶ白くうるわし枝の形ある也枝炭ともいふ。河州北ノ瀧みくやくさ

花炭も同所よりいだし或ハ梅の花もふやうの竹ゝ葉ともおり存ル名品ありて

(俳)白炭や誓ひうるわしき枝の枝 二柳

賣炭翁 △炭賣人之(俳)炭賣や翁のほゝの墨をぬる暮の菊

(詩)賣炭翁詞 東坡

積火變深黛煙ニツヽミ上レバ黛火ニツヽミ下リ牙角ノヤウニナツタ火ノ形ガヤウニミエル

嘶忽怒牙ヤ角ノヤウニナツタ火ノ形ガヤウニミエル

炭斗 一名烏府。炭入る器ありふくべ又ハ籠などいろ〳〵なり

助炭 助炭ハ炭をたすると云ておのれしのことなり

爐 △囲炉裏△地炉。炉ハ今茶人の用るハ方一尺四寸ゑ。山家の

もの又裏国のもの八其製大ようゝそ

堂上ふうにも其製大ようゝそ

埋火 △炉火。哥ふ炉火の題ハ埋火を詠ア。又わの訳ハ前ふ出

(哥)夫木「山松のねさしこめ埋む火のうつもれなくて世をもふるかな 俊成

埋み火のあたゝかさよふけゆく
こゝろふるさとぬくもりの手まくら　式子内親王

詞　うきおこし。埋火のこと。炭さしを。
名所　埋火のあたゝかさよふけゆく。まるの物そ
ねざめをさそふぬ。ねざめ　目覚ル　かさね
こし　曙ふたし　潤る。こゝろにかゝる。
埋火のあはれ灰のしたにのこりて　あはれ
こゝろぐるし。うきをつまなくてこゝろ。
思ふ。うきをつまなくてこゝろ。
述懐　埋火のいきくるしきかなしきこゝろ
のふかゞくしたのこえんばかりをしき
連　埋火や本の下つゝしみをも　昌休
うつみ火よひく〳〵と　廟や　まるの空　紹巴
俳　埋火や我と二人のうちしめり　其角
埋火やねうちもなきおのふるか　支考
埋火や昔うたひし女　許六

詩　炉ノ詞　楊審

天地風霜日夜新　天地ノ間ニ風ガ吹タリシモカフツタリ
地炉穏坐煖如春　炉

詩　炉七字對句　詩礎

客來寒夜火爲媒　且呑一盃
サムイヨニ客ガクレハ炉ノ火ヲ
煖酒仍將半栗煨　蚯蚓鳴
サケノカンヲシテサカナハヒツジノクリヲヤウトオモフ

塗炉縁　春ハ炉ヲヌリ立ル木地の炉
縁を用ひ冬ハ是を用ふ

火燵　置火燵。こたつ　ハむし　名
し近世の好こうるべし　支考

俳　侍ハ扱さゝ切るふこたつ哉　支考
宴席ふ猶さゝ切さゝ忘ル垣火燵　仝

世之介の笠人加る巨燵哉　許六
押入のねこの行ん抽ん抽る　景州

狂　抱掩ノ所ヲ　ぬくもりの

火桶　△桐火桶　△火鉢。火鉢を近
世の名なり火桶ハ昔ようの
名なり今土あぶく作るを火桶と唱ふ
れども昔ハおゝーきゝて火桶といひ〳〵

哥　拾遺「ゐハかきもつ」

能　柚ケ名火桶ふかける柿の嫁茶竜
「なるなり」や「ことく火桶のわらひ草」柳素

狂　ぬいそぬつまきみさふ〳〵桐火桶
「ぬくもり」南和

手爐　俗ニ手焙小さき火鉢の事なり　△懐炉

能　一役ハたれもまゐ炉のはなれ　青飛
「ぬくもり」身もあらむ

湯婆　湯を入る器なり　銅。又土ニて焼也

哥　挙白集「さむきあしたに」

能　わらふたんをしきて嫁入
「ぬくもり」の伽口を閉たるうんほゝ　來山

衾　△敷ふとん。ふとんハ卧具なり
寒夜ふけ引。「ぬくもり」てもさえ
「ぬくもり」ようもの「ぬくもり」なくて寒夜を忘れ「ぬくもり」よしをもむ

哥　さむきあしたおもつまをとめもいふ
風もたまらぬ麻て小ふとん家房

夫木「きてうともそ」みふようせは寒うる衾を　忠房

詞　△小ふとんまゐ△麻ふすま
△あさて小ふとん麻の小ふとん△ふとんの名
△古き衾ハ衾の表裏ともに損傷ありて
△たけの小衾ハたけのこ。毛ニの衾。ねやのふすま。
ふとんの下に
衾。薄ぬる衾。

能　工夫の足をふばく衾の
かなときゝ。夜のふすまの衾。いりこ衾

衾ノ詞

詩　龍紋巧織吳綾美鳳彩新粧蜀
錦香　龍ノモヤウヲオリタルタゴノニノアヤガツクシクホウヲヨイロイトヂオツタ

ショクヨウニシキガウキタツヤウナ

燕寝覆時篭翡翠合　カブレバヒスイトイ

歓擁處效鴛鴦衾　フトリノモヤウモコモツテアリ婦人ヲイダクトキウチキレハモヤウヲヨシトリノ子ヲヲスルヤウナ

蒲團　ふとんとハ蒲の穂わた或稲わら苧わらの木綿ハ近世の事〳〵

俳　むかしハ蒲の穂を入れふとんの形ばかりにて芭蕉

狂　宝暦のころふとんかつくもうるとふとんよみをわすれる　千竹

紙衣　△紙衣ふとん　△紙衣ともいふ　老人の着てかろくてよく風をふせぐ也へよ製とするなり

俳　昔せう〳〵紙衣にて其角

頭巾　△九頭巾　△角ずきん。法樂ずきん四角ゟ仕立ゟるを帽とゆふ漆のごとく丸くらくらくとでゆるゟるを冠といふ唐令ゟもろくの時服をたまふ冬ハ頭巾一枚とゟこれハ礼服をいふなり

日本〳〵ハ頭巾を著〳〵人ゟ達事を無礼と云

俳　頭巾とハ祝かぶり死のゟのきうめんるゟ改巾ゟ五楼

足袋　堂上ゟ民間冬の用ゟ四季ともふ召ゟ

種類　○皮足袋。刺足袋。木綿足袋　○雲斉ゟびなど品ゟいろ

狂　我乃一ハゑもゆゟて華ゟびや苔ゟふねの棹もゆゟさん芳室

綿　△綿打　△綿操　△延綿　△唐綿わゟのみを三秋の部綿取の條出

束綿　わゟよ作れる形おゟつて名づく　△綿つむ　△臂綿。右いづれも

綿帽子　婦人の頭巾ゟ婦人頭ふいたゞく羅ゟを用ひ冬ゟ綿を用ゐ夏ゟを礼ゟ改ゟ

俳　猩ゟを女ふねゟ綿帽ゟ舊里

狂　綿帽ゟ小ゟのゟ二八の眉乃山のいゟゟき　與射

綿衣 真綿ふてゞおもざくのやく製くる物
もろ〳〵名りと付て冬の下着とれ

水洟 寒氣の節鼻ようり水乃
ごとくりの出るをいふ

胼 寒氣の節人の手足にひゞ病く

皹 ひゞの甚しくて口のひきて切るごとき之

寒瘡 冬手ゟ之耳なごの赤くそれ
るとこいふいづれも冬の病ゟ

(俳)なきれ振をなうてひうる痛 松子
多汤やにふ動うる猫の耳 其角

妙薬 霜やけハ蛎の売身ともに貝を
火ゟてけ其汁にるをうけて点

○胼ニハ山蜂の巣の黒やけ飯つぶ
ふて付るゝ冬氏の皮又西瓜の皮の子た
るを胡麻の油ゟそ付ろうスせんひゝ
てもよし猫くじくハ妙薬博物筌といへる本に有

冬艸木

(十)(十一)如斯印ひゝハ十月又ゟ
十一月の季ともに伐ろうのうれ
ど哥ふゟ冬の題ようあり

新 なきごハ四季ともに哥ふゟ冬の題ようあり

胡蘿蔔 (ニんじん)

(俳)根ノ形人参ニ似タリト故ふて名づく

始テ胡地ヨリ来ル

(狂)ゆんじんのおりしひ
つひよかもふふとゝなる 貞柳

葱 (ねぎ)

(古訓)紀 和名抄ニ一名荄艸(くさかい)根ふう

△冬葱 △祢ぎ

く入く喰ふても根をようーとゝ
色ゟ祢ぶう又祢ぎなごゝふ又中
空なるゟうへうりかなぐさともいふ又
丸く長くゝゝ枝ゟー故ふ一文字

と名づく三才図会ふ出ようり

(俳)ねぎハ蝶ハれてねぎの白髪ふ青祇

(哥)職冬哥合「行まふせて妹もりねぎの
うんほまもるる花ゟとゟ見る月ろ

枯野 (うんの)

艸木とも冬枯ろる野ゟうき景色ゟむろり

(哥)いろ〳〵の花色へのこふ立出ー
ゟなまくこゝろ見ろれなよろれ 有家

草ハこるみそうのさいしそうしん　光俊
いつよりそうのさいしそうしん

俳　せなかしてのそすゑはと雀の首支考
秸やれひとりこめけ塔こあ紀　東史

狂　み秸ハさとむさーのこひろくと
奥底それぬさむさるそうしん　京景

寄　万葉「くさくさ枯ともとをしるなし紀よ々んも　赤人

俳　くさらわれくさし枯となるの後　騎雀

冬木立　冬うれる枯木のそうさを
いうう多くハ十月の季とす

俳　花のさむ姿ハさひしーみ木立　朝三
ちくもふ父爺のはさんるふすとうる　昆吾
ちまおくふまるれをおもひのみ本立　素秋

寒艸　△冬の草。秋よりくれ残
霜の下にある草をいふ

俳　うれくやせちの色もみその艸　昆吾

冬生類

此部ハ三冬よりわるる生類をあつむ

鷹鳥　古名くちかー　鳥蔵主出

種類　△兄鷹　△弟鷹　△鵰鷹　△鷂　△兄鵠　△鴨鷹　△雀鷂　△雀賊　△隼

△兄鷹　△弟鷹　△鵰鷹　△鷂
△兄鵠　△鴨鷹　△雀鷂　△雀賊
△隼

△燕鳥。鵰ともいふ　隼の雄なり此鳥寒夜ハおのまの足の冷るをうれへ小鳥をこうくつつみ〳〵捌ふれるとう翌朝この鳥をくゝるにこれ甚飛ひやくいつこれ天性の義なり

△角鷹　たうの大なるをいふ　○鵰　くまたかの大なるをいふ

○鷹のことハ四ノ三十五丁メ七ノ廿九丁七ノ五十丁メ等にくわしくいへり

俳　おもおもなるの別まの矮き一眼
あ方よおいこ向こそぬくめる文素

狂　死んこくねろくいきこくぬめをぬくめる　貞室

○右の内△このうちはいろいろこさいこは△をつさい等ハ小鷹也へ秋ともとる尚七月の条見合へ

大鷹狩 〈鷹狩〉〈鷹鳥野〉小

もゝ秋もうつ大鷹をつゐ小鳥をとる
とるハ冬もうつさるゝども鷹狩と
いへだおもらべし〳〵冬〳〵もろ〳〵

(哥) 夫木

日影もふきのかりねのふきこをくも
かつのくさのみなよもつゐしけり

俊頼

ふきさゝぬひつのみうりせてややまめや 国信

狩ゐし今ふゝもかくのかる
ふゝみしその雪れ下おれ 雅経

(詞) 鷹うち。冬ハ。かりそ。かりそす。
はしめう。もゝ〳〵ふの鷹ちのちろきを
やゝ尾のたう尾のよ矢のねよ似くゝと
のされの鷹る。おもまの鷹る。たゐまの鷹る。そもろ〳〵なら。
そをとる鷹る。(てもろ〳〵もをと入雲脈の様のこうよ似くゝと)
うみようれつゞさねをゐ 右のたゐきさ
れのねをふきの尾のくゝ狩うう〳〵の
とつの絵。もゝのまる。もゝ〳〵て終なゐハきを

狩をふんとぐちの狩つゐれのる。
ひくくる。山くつゐくく立る山のくゐてそゝ
早がそれるれの狩ゐ狩。せこの狩。
こな。ぬすゐそる。かりぐれ維よ。いつ
きのこう 禁中へ毎日 よのこうおゐ
のこう 〔帰京〕 かそむの小北。

〔落ゐハ〕 狩場のとのこう 〔帰京〕
かりぐの狩るの条 月
れいろくかへ 〔帰京〕

雪 ふる狩ハるゝ
ふるふるふゐ
たの狩雨こ

狩場の名所ハ春日野 交野 河内
其外所々。河の流の長き次ゐれ

(俳) 犬うてとう狩
深うるへ浜うてうぬくる 簫光

詩 鷹狩七字対句

詩礎

新豊樹裡行人渡 騎似雲
新豊トイフトコロノ樹木ノアイ 二ノリガモノ
ダカラ人ユキガエル人 ヤウニオホヒ

小苑城邊遊獵騎 帯禽歸
小苑城ノアタリヘタカリノ人ガ鳥 オビテトリヲカヘル
ニノッテカヘルノアソタ

(詞) 鷹ノ詞　無名氏

故鷹　制レ鏇北風迴　草盡
平原　使馬開　タカノモトヲリ風ニナビキテノグル冬枯ノ
當場意氣射生來　タル弓八月
野ニ馬ニテ狩スル　臂上角弓如三却月一
ノゴトクタカニトラセスルカリバ・イサマシイモノジヤ

追鳥狩　列卒ゑりゐ雉を追出し…
狩場ゐ雉　鷹におりゐ雉ども
木居　なをと止ゐ木ゐり

鳥ゐ落艸　ゐ小鳥の落る所の艸なり。落草とむりゐもたゞの事ふちびなけれバ本とゐる心
力草　たゞの鳥をゐるゐ艸をいつむをいつ
(哥) はたなの老の立ゐのをゐゐ…
ゐのむもゐれちゐゐゐ　行定

敷草　鳥ゐゐる所をたゐふゐ…ところを落艸ゐいゐゐをひいゐゐ…を羽をひいゐゐ…

ぬす立　鷹狩ゐ鳥のおゐれて艸おとれがゐまゐるがむそゐふ飛といふ又たゐふひいゐ艸のかげを飛をもいふ

鳥立墓　鳥の立所ゐゐゐの所へ狩人のゐゐなり

(哥) 新古今ゐゐゐ

鷹鳥犬　連ねて

△狩杖　鷹狩のとき引ゆく犬と鷹犬と云いやしむるためなり　杖うり

千鳥　正字衛と書異名いそ鳥

の言葉にて

物ハ數の詞の條に印有見合べし

○千鳥ハかもめお類にてせきれいに似て小さし川。海。入江等水辺に在て群居し沼沢などにハすまず千鳥とゆふ

(哥)夕されハ佐保の川風さむみ千鳥なくなり友やしるらん　友則

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな　顕仲

柏玉集　月前千鳥

さよふけて月の玉ちるおきつ浪千鳥なくなり浦つたひして

雪玉集　濱千鳥

月もまだ氷もきよき濱千鳥

同　泊千鳥

なくなくみぎわの月もなかうしてさよふけぬるのとまり舟

同　湊千鳥

みなとさすくだり波ちどりうちつれてなくねもさむくやあるらん

碧玉　岸千鳥

ふねよりもきしにぞ千鳥なきつれてみぎわの氷ふみわたるなり

(詞)△川ふゆる　△小夜千鳥　△村ふゆる　△浦ふゆる　△夜千鳥　△友なし　△ちどり　△夕ちどり　△ねるちどり　△波ちどり　△ちどり。浦ふゆる。ひとなく。やちよちどり。夜ふゆる。浦つたひ。ふるとわをよぎるあり。浦つたひ。ふるとわる。なけふゆる。たちねなく。ともやくこゑ。おがひのおと。友うばちどり。えねず鳴ほれ。かくもさぶしき。やちよと鳴。

煮（ちどうい）まこひ　もくおる　おりおひ　をおりこむそろ
妻こふ。まこふふの　みる。まこひ　ちとう。
旅（ゐ）の心のうらびこよめ　うきこころのおりふしをそふるよりなり
波枕。旅のうきねの　袋さそふ。波まら。
（一ゐ）人のまくらをまるのおくいへ　波子まる
浜ふをぬこれく　ゐともよそう
○みるいろ　ふ　みゐるの　を添くおりふ　まるころまも
い。遠くて水辺の　ものみよこ　合をべー
名所の名水也
○海ゐくふ　のみ川る時　をくうり　夕
のひる時　をぴろ　波ふ添　そゐめ
（連）旅々　ふこ　うん川　みる　絽巴
をさうな　やそうな　友ちとう　仝
（俳）ちくふるなぬちとう　舟の　呂春
玄波のおふきくちふ　嵐雪
（狂）ちょくとみちよくとなちとり
浜のゆふこふつきぬ　貞柳
鴛鴦（をしどり）（異名）（正鳥）
といひ　嶋（めう）を　鴛（えん）ふ水の

上ふ　そふおとをも　又水　ねる
事をもよろこつ　ひこる　ぢ
ど深きハ此鳥の情なり

（哥）新古今集
そうふー　そそも　つくよう　ゐるふ
救ふきこる　をーのひとうね

金葉集　前齋院六條
甲（かぶと）くにおのうれ羽をそねくや
をーの毛衣さえこるーん

夫木集　越前
浮きこん生田のまる小松ふく
はまやあーこふをーのうろ春

（詞）をーのつばひ。羽ばたうこふ。毛（け）薦の衾。をーの村る。をし
瞬（またたく）をーとのうへもおふくも。つがねをーのいう
ね。をーの毛衣。何ハ水　るの示え　合をべし
（連）春おふひまふれ　新坑　水戸
（俳）家ふとい　処る　雪やいつも　袖を八めし　々くり　堅巾

(狂) ひんやりとその女まの色きいろ
為ならばこうるせんくその袖　芝堂

(詩) 鴛鴦詞　古師老

江島濛々烟霧調微緑蕪深
処剛毛衣江心中島がもやくトキリデニエニクイノニヲヲ
ルアメリニオシドリガキレイ渡頭驚起
一雙去飛上文君舊錦机シバ
ヘ人ガクレバソコヲオドロイテタツテメオトヅレデトンデニクハサダメテ卓文君トイフヤウナウツクシイ女ノオツテ井ルニシキノ上ヘイテソノニシキノモヤウニナルノデアラク

(詩) 鴛鴦五字對　同上

文采負奇色
イロクノウツクシヒモ奇妙ナイロヲ負フタトリジヤ
白頭心共在
ハクトウコロトモニアリ
交頸意何長
カウケイロナシアリ
和鳴多好音
夫婦ナキカハスニヨイコヱガ多イ

鴛鴦故事

韓憑婦

大夫韓朋一名憑ト云ヘルム人妻甚美ク

康王コレヲ奪フ憑怨テ自殺ス妻コレヲ聞テカナシミ武日王ト臺ノ上ニ上リテ遊ブトキ臺ヨリ落テ死セリ懐中ニ書アリテ憑ト一ツニ葬ヨ

ヘトシルセシカド王ユルサズシテ塚ヲナラベテ別々ニ葬シカバ一夜ノ内ニ二ツノ塚ヨリ木ハエテ上ニテ枝ト枝ト相連リ鴛鴦来テ其木ニスム朝暮カナシミテ啼コレヲ連理ノ枝ト云搜神記ニ出

鴛の衾　夫婦ヤスラバヒ(ふとねこハ又をとり)をぬいのもの(ふとん)ニする衾(ふとん)又をゝ鳥の水ニなじんでよく鳴くを交く鳴くをもつてゝ鳥の雌雄を交ると云ぬぐゝ鴛鴦帳鴛鴦幌ともいへり

(哥) こおりゝぬるの衾のおもいかも
ふ代をかぬるやこの妹

鴛の沓　堂上方又ハ僧家ニ用ふ鼻高くうへ反るなり

其形鴛の翅に似る故名づく
○又支那にて小鳧を鴨舎といふ

鳧（うも）

鴨の字ハ俗字（種類△真がも
△あきは△さきさ△きこう△沈鳧（異名）青羽
鳥 古々集おほう。沖津鳥 万葉集に出ず

（寄）拾遺 ふかものうかもせぬ舟かもと
千載 翁ぬる
み葉の庵のようきれをしも 顕輔
夫木 ふれそめてきみ
ふれそふるあちのむらを

（詞）うもかも。なにかも。いかも。
うものうき舟かもめ。かものうきこころ
くちつさつくかもめ。かものうきこころ
うはげ。かつくうもる△おちむら△おちの村ある 小鴨の類 うえはあちむら
右の外ある
の條を見るべし 美古かも

（能）後鳥羽院おほりわる 風雪
うくと堀江の時の浦風を 支考

鳧故事

王喬鳥（ワウキヤウガンジ）

王喬葉縣（イ）ノ令トナリ神術アリ毎月朔旦縣ヨリ朝（ラ）ニ至ル其来ルコトニソノ鳧東南（カモ）ヨリ来ル郎（ミヤ）其鳧ノ至ヲウカゞテ網（ミ）ヲハリケレバ一雙（ツヒ）ノ鳥ヲ得（エ）タリ則王喬ニ賜フ所ノ鳥ナリ

脛短（ハギミジカシ）

鳧の脛短シトイヘドモコレヲ續（ツ）ガハ則悲（カナシ）荘子に出タリ

水鳥（みづとり）

水鳥甚多（オホシ）。鷁（ゲキ）。鷺（サギ）。鷗（カモメ）。鷿鷉（カイツブリ）。天鵞（ハクテウ）。鸕鷀（ウ）。かいつぶり。ふ
鳧（カモ）ハ鳥なれど季ふ成りの前條ニ出ル

（哥）あをきみづとりをさそのこほりやうきうみうつくしみと詠るのおもむきなり 人丸
おなじく入江のまふもまそけくそ
みと詠るのおもむきなり 人丸

忠良

(詞)水あそび。うきね。むれくもつらくの枕。羽風。ほて。すゞく。(連)おやさぎ(俳)うきねの外をとりぬ。(連)風ふけバ(寄)旅ちゝくつまのみよう(連)風ふけバ(狂)きのさてふく

浮寐鳥　水鳥のうきねするをいふ。

鷦　此鳥巣ぐひ作る事巧なるゆへ巧婦と名はく東雅ニ出ス

木兎　鵂。木菟ともおほる。八月の季とす。

鱈　塩鱈。俗ニ大口魚ともいふ。故ニ文字雪ニ和字ニ北海多くとれ味ハ生よりも塩よし。

絶品なり　細鱗大魚　頤の下ふくろ　性寒をよろこぶ　夏月ハ絶て無し　南部　松前辺冬至の日より是を釣初る

雲腸　鱈のわた　(俳)雲ゝも味のうれしき山　秀川

蠣　(一名)石花。石ニ生じてつきたるが花のごとし。一説ニ此貝雌雄ともに小さき時ハ牡蠣ニて大きくなる時を待くに口ハ牡蠣ニて汐のさゝやかなるを賞ずべし

(狂)をの一枝一枝口上も能く〳〵み秋の水こゝ有　羅人

汐の泡れ化しかたくりの藝州廣嶋
ゟう出ル八海中に竹垣を立て自
う取付くぐおとくくるをとうて又
いけおく場所ゟ養ひ〳〵諸州ゟさ
くも〳〵の味も中和を得くくはし
自然生ののれい大くても味不佳

(俳)をこてもうくりふ丸ゟその坊万籟
坂むきや我ゟハ〳〵ぬれくゝ其角

蠣舟

てかき浪花川岸所々ゟ舟を止め
来つて他国の者ゟし冬月来るこれ
同日ゟ来ゟて越年して又同日ゟ〳〵る

(俳)蛎舟の風うこそ
坂ふみ〳〵ゟうこそ〳〵人みの厂 友岳

(狂)蛎実と演へのほ乃ゟおう
こそう〳〵へのなうハとそう 道夏

鯨

△鯨突△鯨舟△鋑突(和名勇魚)
万葉ゟ出 (一名)海鰌。雌を鯢といひ雄を鯨とう鰯いとゞ等〳〵の事うる
也へくらの形を大うるゟ等ゟ見立るゟ

(俳)逃る乳ゟけ〳〵やつ数鯨ゟ多鳳
(狂)ゟうまうこそうら追ゟまてゆつく扨
ゟの紙おりふやこふ吸ふゟうり喜木

氷魚

△氷魚使 昔ハ宇治川田上川
等ゟう此魚を貢物ゟ奉也
とぞこれを氷魚の使とう委〳〵ハ
九ノ巻十二丁網代打のゟ条ゟ見るべし
按ゟふ氷魚和名こほり魚とう

(俳)ゟいふおふ氷魚の使やおもる東向
我いのつゝきやおりまて歩ふ野坡
永魚ようやはふてはさ尺の屑温古

鮒

(一名)サヽホリ。形ちそぜふ似て小さ
△大和本艸も形ちそぜふ似ゟう
と出ゟう。白魚ゟ似ゟるハ非ゟ
いさゝの歟白魚ゟあらぬとの〳〵

(俳)彩娥ゟ須みゟ汁雪ふいさゝ靴水
河ゟ社雪ゟ乳のゟの如やさ竜北溟

網代

△網代木△網代守△網代人
○川岸ゟう木ゟうちて網

の廣がりたる形みゐて氷魚のたくさんとれるを網のかゝりたるやうにいふ也又網にて再び出る支を得ざるをよひくいれで再び出るといふ是をすくひ取ことのを意ことてかゝりたるやうにいふ也

（哥）拾遺集　元輔

月影の田上川に網代守ともすれば委しく九月生類四十二丁ふ出

新古今　慈田

網代木にいさよふ波のまよひつゝ行方も知ぬ春の曙

（俳）あらしるにせ公にせいて網代守る支考

あれ其ゝ網代のお守若てもさん芭蕉

（狂）ひりこん因果志らぬや小車

あゝその氷のひとやふるゝも　貞徳

金葉　皇后宮肥後

あふ夜のよる川せよこんゆる網代木い

新古今　藤原定家

夫木　みよしのゝ山の峰ゝの網代木八

波のこゝろにまかせてもみん

（俳）あれ其ゝ網代のお守若てもさん芭蕉

ひとりやねぬるやうにの檜ひ笠

夜興引

冬の夜出申の獣を狩時大

を引くこれをよこひくとふ

柴漬

柴をふーとふ古言ゝ生柴

を枝葉とも三四尺つゝふ切

く川水の浅きところへ積事水の面

ふ集るこゝおゝく網を四方へ張て

柴をこれハ魚をくゝゆゝへ入これ

寒気の時ハこゞ立春後川水ゆ

なるのふかゝりてハ魚柴の下ふ集らず

○淀伏見其外所々ゝゆゝれどもとゞ

て水の浅き所ゝゝ此事なり

（哥）夫木　引つけをろ下に行ゝえ

のゝおさえにおもをいうよせん　俊頼

竹筌

△筌　魚梁の赤ふうけ置の

のがゝ仮うけ入る器ゝ竹ゝゝ作る

（俳）名やう見て後悔のふい卅魚ハ二又

（哥）万葉　山川よ水の瀬ゝゝ

つをそゝーのやとを我ぬすまひー

潤眼　鰯の種類円く長く眼大
うるめとうるめ（十）
（能）亜陳猛ふる鏡の如く眼水 十調
雨勅の麦宅へ来るうるめ乞れ乙州
（狂）なまひやうるめ時は十文文
撒くかとする目むなうるめ 貞柳

河豚（ふぐと汁）（名）鮭魨（異名）西施乳。河豚に家の味ひに似さ
（ふぐ）る四（名）づく。物こふれ腹ふ
くくる四へふぐくろ古名ふぐなりの
畧なり。毒ある魚と心ある人喰ふ
へうに西施乳といひ其腹の私ら
うるを美人の乳よたとくるう
（狂）名こ立ーうる妓よ陳もみめを
ふくれいのちをかけて鰒ん 道乖

妙菜　○ふぐの麦よりくる汁
つはの葉のごとく汁を用ゐし

生海鼠（海鼠（金海鼠。とらご彫ふに似る故名く
（能）ゐ嵐ゑ八個ある間のごとき止水

海鼠　彦火々瓊々杵尊ノ時諸魚
故事　皆仕へ奉ルヲ申ス海鼠獨リ
モノイハズコレニヨッテ天ノ譴責命
細キ小刀ヲ以テ其口ヲ割サク故ニ
今ニオイテ海鼠ノ口析ク是ナ
リ云云 日本紀ニ出

海鼠腸（能）これをこねるやうにしたものあり
（このわた）

鮚　○はつのこ。大なるハ小なるを叔鮚小なるを
みゝはぐろといふ西国にて細を大魚
うるゆへ他国へ切て賣を大魚の切身と
り初細の日ーを昔賞ーたるゆへ
そのゝちの名ら今ハ賤物と成て上用と造

（哥）万葉 鮚つくるあまの
史のおもハ生るん我下もりいを

養生　冬ハ夜早くいねて朝ハ日の
出るをまちて起るをよしとい

必用　此部ハ三冬の要用の
事柄集りしるす

冬占候

○冬の〳〵寅の日こづの〳〵卯の日雨ふれば来春五穀のみのらず高〳〵又かのとの寅の日こづの〳〵巳の日雨ふれば同あしたり〳〵きの〳〵子ゐ雨ふるべし牛羊おおく死また。つちのと卯の日風あれば人民大ゐに煩ふ尤風ふきくれ土烟をこして雲のでくく空さはにりて黄ろき色有ハ吉慶なり黒色赤色なるハ火災あり紅紫色を吉とす

冬天気

戊の日曇るべし其月霜多し子亥の日晴ハ其月雪多し申酉の日晴れば其月雨多し来の日晴ハ其月甚寒し

飲食

此部ハ冬の人力あるく製〳〵する食物を集む

切干

冬大根又ハ蕪を薄くきりて干〳〵貯へ常ゐ煮て喰ふ

茎漬

△茎菜。大根の葉くされ塩ゐ漬るを茎漬とす

生薑酒

酒ゐ生姜を和る（俳生姜と和る）

（狂）名をまぶりかせけとなんとも妙かし〳〵くも砕る世ゐこともあり〳〵

酒ゐ医者の留とおゐ可風

雞卵酒

酒ゐ玉子ゐ投和〳〵なる仕甲ハ料理重宝記ずく

鍋燒

（俳）湯やきやあいこりなり

焼〳〵もち汚くなりぬ　苑羅

杉木燒

杉の香を魚肉ゐうつれ移さん

杉の香を魚肉ゐうつれ移さんぐゐ杉板のく〳〵あ〳〵やく〳〵

風呂吹

△大根ふろふきかぶ〳〵ちいもく〳〵みそとうみく〳〵食ハ

△大根ふろふきかぶ〳〵ちいもく〳〵みそとうみく〳〵食ハ

（俳）ふろ吹や宝子ハ汁のえへおろく杜橋

納豆汁

大豆を煮て土窖ゐ入人くよるひるけふろふき吹　占安

大豆を煮て土窖ゐ入人くよるひるけふろふき吹　占安

（狂）むかふ〳〵ふ〳〵れおまさん

箱蒸

（俳）杉やらやうれて西施ゐ乳の如し　一九

箱ゐ〳〵煮るもの

大坂書林積小館藏版目錄
北久太郎町四丁目 河内屋
岡田新次郎

森島中良先生著
萬國新話 大本 全五冊
萬国地球萬説の内亜細亞州の雑事人物草木器物の奇なるものを畫解一異文珍説眼前に見聞するが如く古今未発の一奇書なり

廣川先生著
長崎聞見錄 大本 全五冊
肥前長崎の風俗より土地の神祭佛事を初め唐人館内の事実紅毛出島屋舗の男女の服食土産の魚鳥野菜酒菓茶器に至るまで萬事あらあらと説を挙ぐれば一歩も労せずして崎陽に遊るがごし

納め貯ふ用るに臨みて採上るそよく乾るやう或ハ塩酒魚鳥などくさらぬやうと僧家ニて初ハ此句も禅僧の意をふくめり

(俳)ほうろくとさゝらとてこれを納豆汁 許六

(狂)納豆の汁なるゆゑあるからとそれとも 百松

柚味噌 (俳)破陣まつくらく尼の 北渕

蕎麦湯 △そばがきをそで湯とき喰ふをそばゆといふ蕎麦の粉を湯ニ和し

て喰ふをそで湯とも云。そばがきを焚て後の時ハ

灰のおとくるをだし汁などかけて食用ふ。そばがきともいふ

(俳)蕎麦粥やおねなのやうなるを天我

○右飲食のゝ温熱を貴て喰ふ

四へ冬の季ふん。製法委ゝ日本歳時記ニ出ル見るべし

和蘭新譯地球全圖 大折一帖
和蘭及諸蕃の物産奇種を考へ地理の委しきを説とをあげて兼学の一助とす

大日本細見指掌全畫 同一舗

莊子國字辯 四冊
世の莊子と説るの多くは見識の杜撰となすふるべし故今南霞主人諸古の參考一平かに重蒙嬰子とするも是を得やすく莊子此三篇の理論を明かに決すさと

孝經里字訓 大本 全一冊
孝經の注釈と平かに解しへ以古ふ諸れ古の増しの弐當用書札恐方字尽しの異之一の別かなまの九族服之今三體いろは日本年代畧記そのほか附合早学問 二冊

同 後篇 二冊
此二書の学問の近道唐土代〻の事日本諸家流儀の伏或ハ詩作文章又續筆道詞学画法墨筆硯紙印肉石印ハ学者附合の詞づまで委〻記文房の飾や衣服調度これ亦で當を弁へ師おとぶて時の間ハ博学大先生となるの人まで

筆道捷昔古早学問 大本 全四冊
入木道の秘伝口傳ら〻く記〻一事も洩さゝなし卸家流の侍歌もび〻集〻筆道けいこの順一なり

尊圓親王御眞翰 全二冊

歐陽詢千字文 石刻 全一冊

錦嚢智術入手書 全七冊
智恵なき人とても此書を一ト通り見ば学ばずして其術を得る事を疑ふ事なかれ
奇妙なる事の秘傳秘密を記し
天地風雨雷鳴をお方うもう或は元宝
まを生ずる無水を清水う男女を
美人うまうと諸病治療を癒治
艸木の花実と自由ふさぜ菓菜の絞へ
や其外人家日用ふ大徳万宝を記せり

拾玉新智恵海 全三冊

同増補 全三冊

同續篇 全三冊

同拾遺 全二冊

日用珍術 万宝智恵海 小本 全一冊
以上智恵海のうちより
して抜萃をくわしくゆく日用
多き事の秘術をとりあつめ

妙術博物笑 全七冊
山本の神吉仙傳をとりく世用
人力のもつぐう妙術諸病の
良薬奇方医薬なれあく
人を助くるの妙方或は蚊のこと去
化とのとえわく手法を人手妙術
數百ケ条まの謎よ居家日用
ゝ珍へ重宝なく限うれそく

関一楽翁先生著
冥加訓 五来合本 全三冊
人の衣食住の冥加を
朝夕の行ひよりけてそと冥加を知
らしむるを要まきまを
けむふうて人生を守
長命富貴子孫繁昌の基ひと

鎮火用心車 三冊合本 全一冊
火の用心のんれとう

貴賤身体直　亜入　全三冊
人〻身うちの心得やうとわき
多作もうかゝることをしるす

和睦論　亜入
寛政二戌年京都下長者町ゟ
孝子清七うり状をもつて

男童宝記　全一冊
諸礼系湯生花乱すべく男ゟ
師を求めずしてそのやうを平ゟ
そもゝゝ弘のそ

書札節用要字海　中本横綴　入王一冊
文章字尽武鑑尽日本
の案文武鑑尽諸家
國郡ゟ諸寺
あるゝ
教ゟりて
侍ゟそのと

大廣益博物笈　三切小本冊　合一冊
此書は天地日月露雪等の理と
ゝき国郡山川名所旧跡神社佛
閣の来歴古実長暦日和の隆晴
諸國貢米の出所改正御武鑑即
役即高附年中行事貴僧高僧
堂上武将歌人俳諧詩人書画
高名茶人聞人の小傳すべく和
漢名誉の人物諸藝流義の名
流名谷名物の出処草木花実
の異名和漢皇代年号年數
諸病の呪方分量九族忌服そ
外世民日用ゝ力を尽す妙術
秘傳ゟ部門を五国字の次席
探ゟ求ゟ便なゝむ
急救五十人ゟ手ゝ及びゝ磨
滅ゝゝ幸ゟ遺洩を大増補
革正して世ゟ行ゟ諸君座右ゟ
便利を得ゟゞゝ
天保六未年再板

季寄詮解 改正月令博物筌 小本

四季各四冊完 十六冊桐箱入

貝原先生の歳時記ありてさ
鳥飼洞斎翁の著述年中
公事 故実 神祭 佛日式日の
作法 草木 花葉 魚鳥 獣
魚おのおの 詠物 季節 部立
その一とせ〳〵 洩すまじくそ
月ごと毎に 人ら會席へ 携る
小便どころ 侍欲連能ら
物と事と 澄句引哥 など
俗事ふうらひそへ 凡雨映晴の
考へ 養生 刺菜の 方 米穀豊み
の儉へ 食物の 狩へ やう 秘傳 秘
密を 別て 雅俗ともに 閑〳〵
大き 徳益あり 薄用摺〳〵
四季四冊〳〵 懐中本も

本居宣長大人著

詞乃玉の緒

和哥のてふをは おのもろ〳〵ぞ 定むる
ふ本書とそ 人皇 代 人皇 年 人皇 帝 人皇 御 人皇 世 人皇 天皇
今のかぶづひのつゞき 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇
ぬまま 綴ひ 文章 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇
をもそ〳〵ぞわしく 吟 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇
てふをは の字おどさし 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇
ろづひの要領 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇

再刻 全七冊

同著

てふをは 紐鏡

哥文 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇 人皇

好人のより
凡皇朝より和哥の道乃ち歌学ありて文まのの及いまざるをもて歌学あれども跋なく紀貫之の辞なきをもて後の好人その時々の歌を集めて古今のごとくなるべき序跋と名づく出処文章の便よりも

全三冊

同 小本

全三冊

増補歌枕秋の寄合
諸国名所山川江海村市野里嶺の歌枕秋の題を物名寄枕詞より合景物おのおのを部類して一紀一居なり

合本 全三冊

掌中秋の寄合
両面一紙一覧便なり

折本

草書淵海 大本 全二冊
艸書數字ヲ集メ書引ヲ附ス

草字彙 円 全十一冊
漢章帝伯英王羲之ヲ始メ宋元明三千諸名家ノ艸書ヲアツメ索ル二書引ヲ以テス清朝堅菴石翁先生ノ華本飜刻ナリ

全七冊

集古妙蹟
漢土諸名家ノ筆跡ヲハジメ本朝古今ノ表文碑碣詩賦法帖往文記録墓誌牒状ヨリ三筆三跡等ノ真蹟ヲアツメ行書手本ノ書引ヲ以テサグリ安カラシム

全四冊

世說鈔撮
世說新語ハヨム人ニヨリテヨリテ童蒙ニデモ新語ヲヨミ得トクスルニ至ル

全四冊

同 集成
大典禪師鈔撮ニモレタルヲ補ヒ大成ナレタル善本ナリ

十七史蒙求　合本四冊

十七史ノ間聖君賢相忠臣義士
文人武夫孝子烈婦功業事
実類ヲ以テサニ集シ蒙求ニ比ス

大廣益會玉篇大成　二冊

射後百一方　香川先生著　全四冊

率中窪乱其余百病救治ノ方
中毒備急要訣疫癘ヨヨニ牛馬
六畜ノ治方世民急救ノ秘薬丸
散丹圓ノ諸方ヲアツメ記サレタリ

天保再刻
日本書記　十五冊

同　片カナ付　十六冊

春秋社日聴義　全

春秋社日ノ説ヲ聞キ書ス
易経ノ説モアリ

孝子式用　絵入　全一冊

日用秘密蔵　小本　全一冊

妙術妙薬ナドナリ　秘伝